



説教要旨「ユダという弟子がいた」

ルカによる福音書 22章1～6節

“イスカリオテのユダ”この名を聞くと、多くの方は“裏切り者”と連想するのではないのでしょうか。何故ユダはイエス様を裏切ったのか。多くの小説家はその想像力をもってユダの心情にアプローチし、様々な“裏切りの動機”が考えられてきました。それらの推察が正しいのかどうかはわかりません。このルカによる福音書が告げているのは、「イスカリオテのユダの中にサタンが入った」(3節)ということだけだからです。“サタンが入った”それは、神様の思いではなくて、自分の考え、計画によって、事を進めようとするということではないのでしょうか。ユダの動機がどのようなものであったとしても、ユダは神のご計画に信頼することが出来ず、神を侮り、自分の考えた計画に従い、これを行おうとした。それがユダの中にサタンが入り、イエス様を裏切ったということなのではないでしょうか。

では何故、サタンはユダを選んだのでしょうか。ユダが悪人であったなら、サタンは悪人だったユダを選んで入り込んだのだと考えられるでしょう。しかし聖書は、ユダが特別悪人だったなどとは語ってはいません。ただ「十二人の中の一人」とだけ語るのです。それは、十二弟子の誰もが“ユダ”になる可能性があったということでもあるでしょう。そして、私たちも“ユダ”になる可能性があるのです。

サタンの誘惑は、神様よりも人間のこと、自分のことを優先させるよう私たちを誘います。自分のことばかりを優先させていることを思わされます。サタンの誘惑は実に巧妙です。最初は小さなことから徐々に、「これぐらいはいいだろう」と。そしてどんどんエスカレートして「自分のことを優先させて何が悪い」と開き直り、仕舞いには「これは神のみ旨に適っていることだ」などと自分の都合を正当化しだすのです。

私たちは誰であろうと自分の都合を多かれ少なかれ優先させて生きています。そこで開き直るのではなく、正当化するのでもなく、自分の都合ばかりを優先している者であることを、ごまかすことなく見つめる勇気を願い求めます。